

多摩丘陵と三浦半島の間地域植物 —特に昭和30年代と現在を中心として—

長谷川 義人

Yoshihito HASEGAWA: Floral Observations of
Intermediate Area between the Tama Hills and
the Miura Peninsula

はじめに

三浦半島の付根にあたる横浜南部は、北に延びる多摩丘陵との間に挟まれた地域である。私がこの地域に関心を持ったのは、ここに住所があったからというよりも、「多摩丘陵・帷子川流域の植物目録」(出口, 1953)を入手したことによる。三浦半島には、すでに「三浦半島植物誌」(増島・石渡, 1950)があり、その中間地域のフロラは白紙であった。

私は1958年(昭和33年)に備忘として「横浜市内南部高等植物仮目録」(目録部分35頁)を作成した。その範囲は中区・南区(当時は現在の港南区を含む)・磯子区・金沢区・戸塚区の一部(旧本郷村の中野・上郷・公田の3町で、現在の栄区の一部)であった。その後1965年第1回改訂, 1967年第2回改訂で4頁を追加し、この総数は変種以上約937種類(Taxa)であった。1975年に補遺として約59種類を追加したので、996種類となった。しかしながら、これらは資金の都合で一回も正式に発表はなされなかった。

この調査は1950(昭和25)年頃より始め、少しずつ地元から周辺に地域を拡げ、1955年に最も回数多く出動した。まだ開発前の地域がほとんどで、顧みると自然豊かで本当によい時代であった。当時は記録がほとんどで、その後は標本を作成する暇もなく、生育地を失い絶滅した植物が多い。今回、1958年に作成した目録を参照し当時を振り返ってみたい。

地域の植物と環境

西 区(第2回改訂後、調査地域に編入)

既に市街化しており、記録のみである。明治15年の地図では帷子川の河口には平沼という汽水の沼があって横浜湾に向かって三つの水路があり、月見橋、萬里橋、富士見橋の三橋があった。横浜駅東口に現在も同名の萬里橋がある。ここにはシバナが生育し、西谷付

近ではアユを釣ることができた。他には西戸部町にヨコハマダケが記録された。

中 区

本牧・間門の海浜にハマボス、フジナデシコ、ハマツメクサ、ホコガタアカザ(帰化)、サンカクイ、ヒメガマがあり、八聖殿の断崖には波が打ちつけ、松林の間から海の拡がりを一望できた。夜にはクロダイ釣りの人がこの崖を下りていった。ここには当時キノコギリソウと呼んだものがマルバシャリンバイと共にあり、チャボシバヤナギと呼ぶ崖地生態形の葉の円いものがあつた。キノコギリソウは三溪園内にも長く残っていた。三溪園にはミツガシワ(逸出品?)やイガアザミがある。またこの浜ではシログリスを釣ることができた。久内清孝氏は西之谷町善行寺でオオキジノオを採集されたと言われ、また根岸にシノブがあつたと語っている。野毛山動物園にはヤドリギがある。

磯子区

汐見台団地のある丘陵は以前は畑と湿地があつて、信じ難いことであるが台地上を小川が流れていた。この湿地でヒメシロネを採集した。久良岐公園の脇にはノアズキ、マツカサススキがあり、岡村町の水田にはフタバムグラがあり、仲久保の上の切り通し上にはヤブレガサがあつた。汐見台から森町の浅間神社の丘陵下はかつては杉田町の市電が走り、屏風ヶ浦・白旗海岸で遠浅の砂浜はアサリがたくさん採れた。この崖上には小さな滝があり、中区側の根岸の台にも滝があり(滝之上の地名もある)、両方の丘陵とも水脈が豊かであつたと思われる。中区の間門、磯子区の森の両方には谷があつて、ケンボナシの大樹が第一層を形成しこの谷を覆っていた。

上大岡から笹下川沿いの田中町の水田にはスズメノトウガラシ、ヒメミソハギが群生していて、ヤブツル

アズキもあった。栗木町から上中里・氷取沢へは現在の金沢文庫に抜ける街道はなく左側の山裾に道が通じ、氷取沢は最奥の部落で円海山の下をまくように大谷が入りこんでいた。イヌザクラ、カワラナデシコ、クラムゴケがあり、円海山の峰の灸にはアマチャが植えられ、ここにはガガイモ、ネバリタデ、ヘビノネゴザがあった。磯子区や南区には、当時、帰化植物のアメリカキンゴジカをよく見かけたが、今は全く無くなり、帰化植物にも時の流れを感じるのである。田中町から入った谷部野町（現・洋光台）は雑木林の丘陵とその間に広がる谷戸の水田とで植物も豊富であった。水田沿いの小川にはモエビやカジカ（魚）の類がいて山道には「左かまくら道」と書かれた道標や野仏などが大変多かった。夕方には蟬しぐれ（ヒグラシ）をきくことができた。

南区

私の地元で、昭和25年位から中里・六ツ川・別所へは頻繁に出向いた。雑木林と水田がある自然豊かな地で、中里にはヒメガंकビソウ、ツクバキンモンソウ、スズサイコ、フデリンドウ、カノツメソウ、マキエハギ、イヌエンジュ（最後の一本は井土ヶ谷乗蓮寺にあったが増築でなくなった）、コブシ、ヤナギタデ、ハシバミ（林学の草下正夫氏は大変珍しいと言われた）、キンラン、ギンラン、ササバギンラン、キクバドコロ、アマナ、オタルスゲ、セイタカヨシ、ハシゴシダ、ウラジロがあり、オタルスゲは神奈川県での初採集品であったが、現在その産地は失われた（標本はY C M^{*}）。六ツ川はその名の通りかつては町中を小川が流れ、昭和22-3年頃にはバス停六ツ川の下流側でタナゴと考えられる魚を掬うことができたし、こここの谷戸の各所には夕方になるとホタルが飛び交った。ホタルは中里町や大岡川でもよく見られた。当時はバス停上六ツ川にザルなどの竹製品を造る家が一軒あったのみで戸塚に向かって引越坂の植木屋まで、大池を除いて民家は全くなかったように記憶している。この六ツ川は素晴らしいフィールドでサワヒヨドリ、タヌキモ、シソクサ、キクモ、スズサイコ、ミズマツバ、ノアズキ、マキエハギ、ツルフジバカマ、ツクバネガシ、ホシクサ、アオコウガイゼキショウ、コアゼガヤツリ、シカクイ、メアゼテンツキ、ミサキカグマがあった。奥になる別所もカラタチバナ、アワブキ、ヒトツバハギ、ジロボウエンゴサク、カワラナデシコ、ヤマハンノキ、オオバノトンボソウ、アマナ、ハナビゼキショウ、コアゼガヤツリ、ミズガヤツリ、ハイホラゴケがあって、白

山神社にヨウラクランがあった。現在の別所インターチェンジの下の水田にヤナギスプタ、ミズオオバコがあり、畔にはオニスゲとコウヤワラビ、ヒメシダがあった。永田の山王台周辺も豊かな林に包まれ、ツクバキンモンソウ、コブシ、ヤマアジサイ、シンミズヒキ、クマガイソウ、ミヤマナルコユリ、アマナ、アオコウガイゼキショウ、モエギスゲ、シラコスゲ、ミヤマシラスゲ、ミサキカグマがあった。谷戸奥には小さな溜池がいくつかあって、ヒシが浮いていた。林下ではコジュケイが繁殖し、その声はいつでも聞くことができた。岸にはジャヤナギがあり、谷戸は水湿の地であった。ここで採って大井次三郎先生にシカクホタルイと同定していただいたものは今いうイヌホタルイであろう。他には井土ヶ谷の住吉神社の山（今は根岸湾埋立てで平地となってしまった）でタニセリモドキと考えられるものを採ったが茎葉のみで未解決である（出口長男氏は保土ヶ谷区で採った）。こここの隣の乗蓮寺には大カヤとイヌザクラがある。弘明寺の京浜急行踏切の脇には崖にアリノトウグサがあり、弘明寺公園にはツクバネガシもあった。またヒメアカガシと考えられるものも何本もある。大岡川の岸にはセイタカヨシ、帰化植物のクソニンジン、トゲミノキツネノボタン、コシミノナズナ、ウマノチャヒキがあった。堀の内宝生寺の山も自然が多く、ヤマネコノメやオオアオスゲがあった。西森稲荷社の大ケヤキにはヤドリギが生えていたが、ケヤキは伐られて今はない。

港南区

南区から独立したが当時はまだ分離していなかった。上永谷の馬洗橋からよく野庭へ向かって入った。上野庭へは藤ヶ沢のトンネルを通過して何回も行った。野庭は昭和30年代はまだタヌキやノウサギの棲む田園でノハラアザミ、キクアザミ、タヌキモ、キセウタ、サワフタギ（神明社内）、ヌマトラノオ、カノツメソウ、ヒトツバハギ、アオナワシロイチゴ、イワガラミ、ヤノネグサ、ヨウラクラン（浄念寺または野庭神社）、イヌノヒゲ、イトイヌノヒゲ、ヒロハイヌノヒゲ、マコモ、ミズニラなどあり、オギやススキの穂波を渡る風の強い日には松籟を聴くことができた。イトイヌノヒゲ、ヒロハイヌノヒゲ、ミズニラは日限山一丁目の下の現在丸山台三丁目（上永谷駅の上方にあたる）にあった。また永谷天満宮の先から日限地藏（長福寺）へ行く道脇のサツマイモ畑にはシマニシキソウ（帰化）が群生していた。私が初めてネコノチチを見たのは下永谷町芹ヶ谷の地で芹ヶ谷小学校の斜面に群落をつくつ

て下の水田脇の溝を覆うように数十本が幹を延ばして
いて秋日にその果実は柿色にかがやいていた。下の水
田にはシソクサ、キクモ、アゼトウガラシ、ミズマツ
バ、コミカンソウ、ハナビゼキシノウが畔にはオニス
ゲがあった。上大岡の周辺では笹下にオグルマ、カラ
タチバナ、ヤブツルアズキ、オオアブラススキ、ヒル
ムシロがあり、最戸町にはミゾハコベ、大久保町にオ
ニスゲ、オオハリイまたはセイタカハリイと思われる
ものがあった。上大岡駅の海側の高台を下った辺りには、
オミナエシ、タヌキモ、コアゼガヤツリ、ミズオ
オバコがあった。ここは市営墓地と以前は火葬場のあつた
近くである。日野も思い出の地であつて、日野のバ
ス停で下車し春日神社の脇を通り過ぎると民家はやが
てなくなり峠までは水田と谷戸の連続で水田脇の斜面
にはマツムシソウ、センブリ、ミシマサイコ、イブキ
ボウフウ、クサネム、マルバヤブマオ、ウシクグ、ヤ
マイ、マコモ、オオアブラススキ、ミサキカグマなど
あり、現在の港南台周辺の繁華を考えると脳裡に浮か
ぶ昔日の田野を想いおこすのである。笹下七丁目付近
の小川にもモエビヤカジカ（魚）が棲み、傍らにはヤ
マナラシがあった。

金沢区

海岸と釜利谷の谷戸に特徴があった。柴町（柴の漁
師町）の海岸には、ユキヨモギ、ハマボス、タンキ
リマメ、フジナデシコがあり、漁港を出外れた崖下の
潮回りのよい場所ではセイゴがよく釣れた。野島には
ハチジョウナ、ガクアジサイがあり、夏島町との間の
干潟にはシオクグ、アイアシが生えた。平潟にそそぐ
宮川の下流域が泥亀町であつて、金沢文庫から八景の
京浜急行の線路脇はアシ原であつた。ここにはオグル
マ、カワジサ、ヒメサルダヒコ、タコノアシ、ヤナギ
タデ、コウキヤガラ、サンカクイ、アイアシがあつた。
この場所は当時、六浦中学校の村上司郎氏が生徒を指
導して調査されたことがある。文庫駅の北側にもハス
田があり、オオアカウキクサ、サンショウモなどがあり、
久内清孝先生によれば、ミズキンバイやデンジソ
ウもあつたとのことである。釜利谷は広く、キクアザ
ミ、オミナエシ、フデリンドウ、センブリ、イブキボ
ウフウ、ドクウツギ、ミヤマシキミ（各所にあつたこ
とは珍しい）、ヤブツルアズキ、ウラゲワレモコウ、
シロバナハンショウヅル、ミヤマウズラ、キクバドコ
ロ、ハシゴシダ、ツルデンダがあり、白山道奥の谷戸
にはカリガネソウの大群落があり、この谷を抜けると
鵜は特有の香りに包まれた。円海山から六国峠への道

にはキクアザミ、スハマソウ、ウシクサがあつた。朝
比奈にはヒメカナワラビ、オリヅルシダがあつた。六
ツ浦から池子へ向かい、京浜急行の踏切を渡つた水田
にはカワジサ、ムシクサがあり、さらに進んで民家の
間を抜けるとアケボノソウ、ドクウツギ、ミツマタ
（逸出）、ナツノハナワラビ、オオアカウキクサが見ら
れた。八景の瀬戸神社境内には手の届きそうな樹幹に
フウランがたくさん着生していた。八景駅の山側の木
村家の持ち山にはオニグルミ、ムクロジ、マルバヌス
ビトハギ、ハナヤクシソウなどがある。また富岡駅を
下車して山側左手斜面は竹林となつていて、クマガイ
ソウが数百株あり、一斉開花した様子は見事であつた。
また、奥の谷戸にはキクアザミ、スズサイコがあつた。
戸塚区（現・栄区に相当）

最も豊富なフロラを持っていたのが現在の環状4号
線のバス停、中島から金沢側に入る谷戸で、入口から
見る谷は桃源郷そのものであつた。現在の庄戸である。
ここにはキクアザミ、マツムシソウ、オミナエシ、タ
ニジャコウソウ、ヤマルリソウ、ミシマサイコ、イブ
キボウフウ、カノツメソウ、ノジスミレ、ウラジロマ
タタビ、ドクウツギ、マキエハギ、イヌザクラ、ニリ
ンソウ、スハマソウ、カワラナデシコ、ヒメアブラス
スキ、チョウセンガリヤスなどがあり、山中に由来不
明のネズミサシの木があつた。瀬上沢の奥にはヌマダ
イコンがあつたと初山泰一先生からお知らせがあつた。
反対側の八軒谷戸を入った公田側ではタウコギ、カセ
ンソウ（間瀬美保子氏）、アキノギンリョウソウ、ウ
ラジロマタタビ、オオツヅラフジ、サワハコベがあり、
上郷、光明寺ではシロバナタンポポを見た。

周辺地域

地域外では鶴見川のJR鉄橋下流にウラギクがあり、
秋には美しい彩りを添えたが、浚渫で全くなつた
（初山先生、教示）。三沢池（現在は無い）にはマルバ
オモダカとシズイがあつたと久内先生から教えられた。
保土ケ谷の狩場町は公園・墓地・研究所があつてコケ
リンドウ、ヌマトラノオ、キバナノマツバニンジン
（帰化）、キンボウゲ、カリマタガヤ、ミノボロモドキ
（帰化）などがあつた。クサレダマが保土ケ谷区権太
坂にあつたのを初山先生と共に見たのは37年も前のこ
とで瀬谷区にも本種はあるので昔は多くあつたのであ
ろう。栄区の小菅ヶ谷町もかつてはよいところで、タ
ヌキモ、オノエヤナギ、シカクイ、イヌホタルイ、ク
ログワイなどある水湿地であつた。鎌倉市岩瀬の谷に
は初山先生によればヒンジモが見られたとのこと、

キクアザミ、ツルアリドオシ、アキノギンリョウソウ、シラネセンキュウ、クモラン、エゾノサヤヌカグサがあり、奥の散在ヶ池にはスハマソウ、ミヤマウズラ、ミヤマシラスゲ、オオヒメワラビがあった。また池子にはホウライカズラ、ミヤマウコギ、オオウラジロノキ、タコノアシ、コハシゴシダがあった。オオウラジロノキは遠く離れて2本、現在も見られる。

考察とまとめ

この地は第四紀更新世後期の最終間氷期には三浦半島が島から多摩丘陵と狭い陸橋で接続した地域で、それは12-3万年前である（神奈川県植物誌1988）。そういう意味からすれば地史的に関連する遺存的な古い種類はなにもないと言ってよい。

この地域のフロラの地理的特性を述べてみたい。ここは古相模湾と古東京湾が最も新しく遮断したところで、最も関東ローム層の影響の少ない地域で、東側は野島層が、中央部は浜層、中里層、小柴層、大船層が、北部で関東ローム層、保土ヶ谷レキ層、屏風が浦層が、南部で池子層と逗子層が占めていて表土の少ないことが特徴である。一旦、植生を破壊すると回復に大変時間がかかり、ミズキなどがその主力となるような地である。

まず、多摩丘陵から南下して分布を拡げている種としてツクバキンモンソウ、ジュウニヒトエ、ニリンソウなどで、これらはほぼ三浦半島の先端近くまでである。チゴユリは細々ながら半島先端まで南下している。ヤマウルシ、イチリンソウはこれと異なり、多摩丘陵に限止して、中間地域・三浦半島に全くない。アカシデも同様のパターンで港南区、金沢区から三浦鷹取山で南下を止めている種で、ミヤマナルコユリ、ワニグチソウも保土ヶ谷区から南・港南区までで限止し、多摩要素と考えられる。イヌエンジュは川崎市麻生区などにはあるが、横浜市南区で止まっている。

多摩と三浦にあって中間地域にないものはコクサギとガクウツギで、分布しないのは、下末吉海進による不整合があるのではないかと考えられる。フユイチゴは南区内の中里・別所などにあったので多分データ不足によるもので、この範疇には入らないと考えられるが、しかし、他の古相模湾地域には全くない。イカリソウとコウモリカズラは三浦半島先端部にあって中間地域と多摩南部に欠ける特異な分布である。

三浦半島から北上する種は極めて稀であって丹沢・嶺岡帯が存在した時代に三浦半島に分布した一部の種

に限られる。

カントウカンアオイとミヤマウズラは丹沢と三浦半島にやや多産し、多摩には前者は稀にあるが、後者は全くないようである。三浦半島のカントウカンアオイと多摩丘陵のタマノカンアオイは対照的な分布を示すもので前者が中間地域南半にあるのみである。

暖地性植物で三浦から金沢区・栄区・鎌倉に限止しているものはヌマダイコン、ジャケツイバラ、コ克蘭などである。またカナワラビ類のホソバカナワラビ、コバノカナワラビの両種も三浦にあって古相模湾地域にない要素である。ツクバネウツギも三浦にあってこの地域では金沢区釜利谷以南に分布している。

次にこれまでに記録された種類数を次に掲げる。（西区所産品の数も加える）

Pteridophyta 羊歯植物門 在来種102（雑種を除く）

Spermatophyta 種子植物門

Gymnospermae 裸子植物亜門

在来種 5, 栽培逸出 3

Angiospermae 被子植物亜門

Monocotyledoneae 単子葉植物綱

在来種 238, 帰化種 67, 栽培逸出 13

Dicotyledoneae 双子葉植物綱

Choripetalae 離弁花亜綱

在来種 406, 帰化種 105, 栽培逸出 25

Sympetalae 合弁花亜綱

在来種 204, 帰化種 71, 栽培逸出 16

以上をまとめると品種以上は総計1278種類となり、在来種が955, 帰化種243となり、計1198種類である。

帰化植物の占める比率は約20%強で5種類中1種は帰化植物である。

絶滅または絶滅に近い種数は在来種955種類中、合弁花類で約44, 離弁花類で約31, 単子葉類で約41, 羊歯類で約24, 合計約140種類で、この数値は更に上昇するので約15%がこの40年近くの間には消滅したと考えられる。

謝 辞

本調査に当たっては久内清孝、木村有香、大井次三郎、佐竹義輔、伊藤洋、初山泰一、奥山春季、大谷茂、草下正夫、佐藤達夫、浅井康宏、川村カウ、伊達健夫の諸先生並びに諸氏に同定その他でお世話になった。これら調査の標本の一部は横須賀市博物館に収めてあることを付記する。また長く御指導を戴いた理学博士、

笠原基知治先生に謝意を表する次第である。大場達之氏はじめ神奈川県植物誌調査会の皆様にも篤く御礼申し上げます。今回、投稿を慫慂された高橋秀男、松島義章、勝山輝男、北川淑子の諸氏にも篤く御礼を申し上げます。

文 献

- 出口長男, 1953. 多摩丘陵帷子川流域の植物. 113 pp. (自費出版).
- 出口長男, 1968. 横浜植物誌. 6+256 pp., pls. 44. 秀英出版, 東京.
- 長谷川義人, 1987. 植物雑記 (18) 丹沢-嶺岡帯植物群. *MAKINO*, 16: 6.
- 長谷川義人, 1988. 三浦半島の丘陵・山地性フロラの成立ち. かながわ県民アカデミーテキスト, 三浦半島の自然.

- 神奈川県博物館協会編, 1958. 神奈川県植物誌. 257 pp. 神奈川県博物館協会, 横浜.
- 神奈川県植物誌調査会編, 1988. 神奈川県植物誌. 1988. 1442 pp. 神奈川県立博物館, 横浜.
- 増島弘行・石渡治一, 1950. 三浦半島植物誌. 85 pp. 横須賀郷土文化研究室.
- 初山泰一, 1982. 逗子地区 (ZU) の中1981年に記録し得たる神武寺 (三角地帯) の植物. 12 pp. 神奈川県植物誌調査会.
- 高橋秀男, 1985. 神奈川の植物地理. 神奈川自然誌資料, (6): 1-11.
- 横須賀市自然博物館, 1989. 三浦半島の植物-最近の研究成果から-. 1+60 pp., pls. 4. P.72-※ 横須賀市自然博物館収蔵資料, YCM-V21867~8

(神奈川県植物誌調査会)

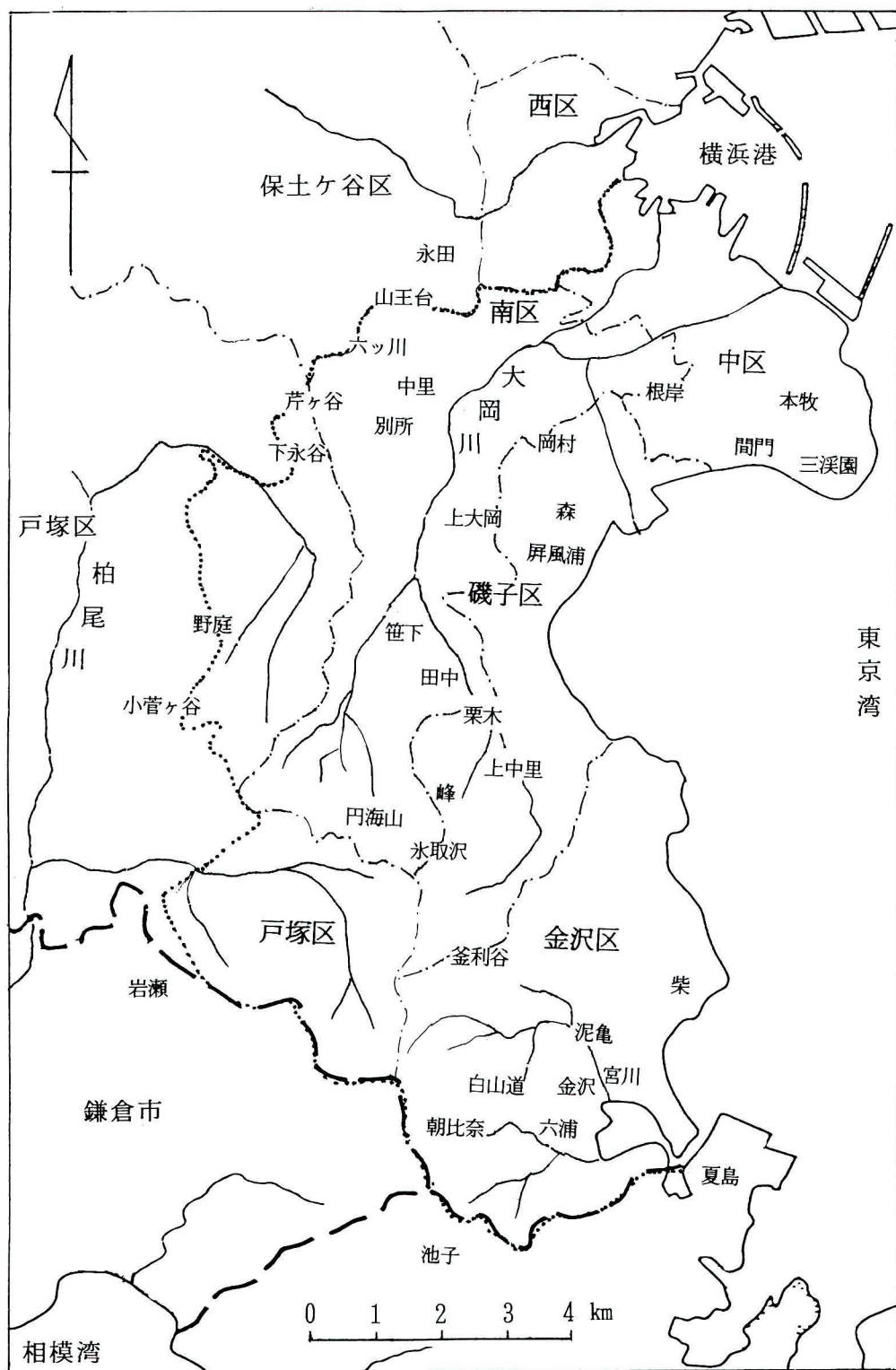


図1. 横浜市内の調査地域 (点線内, 行政区分は昭和30年代)